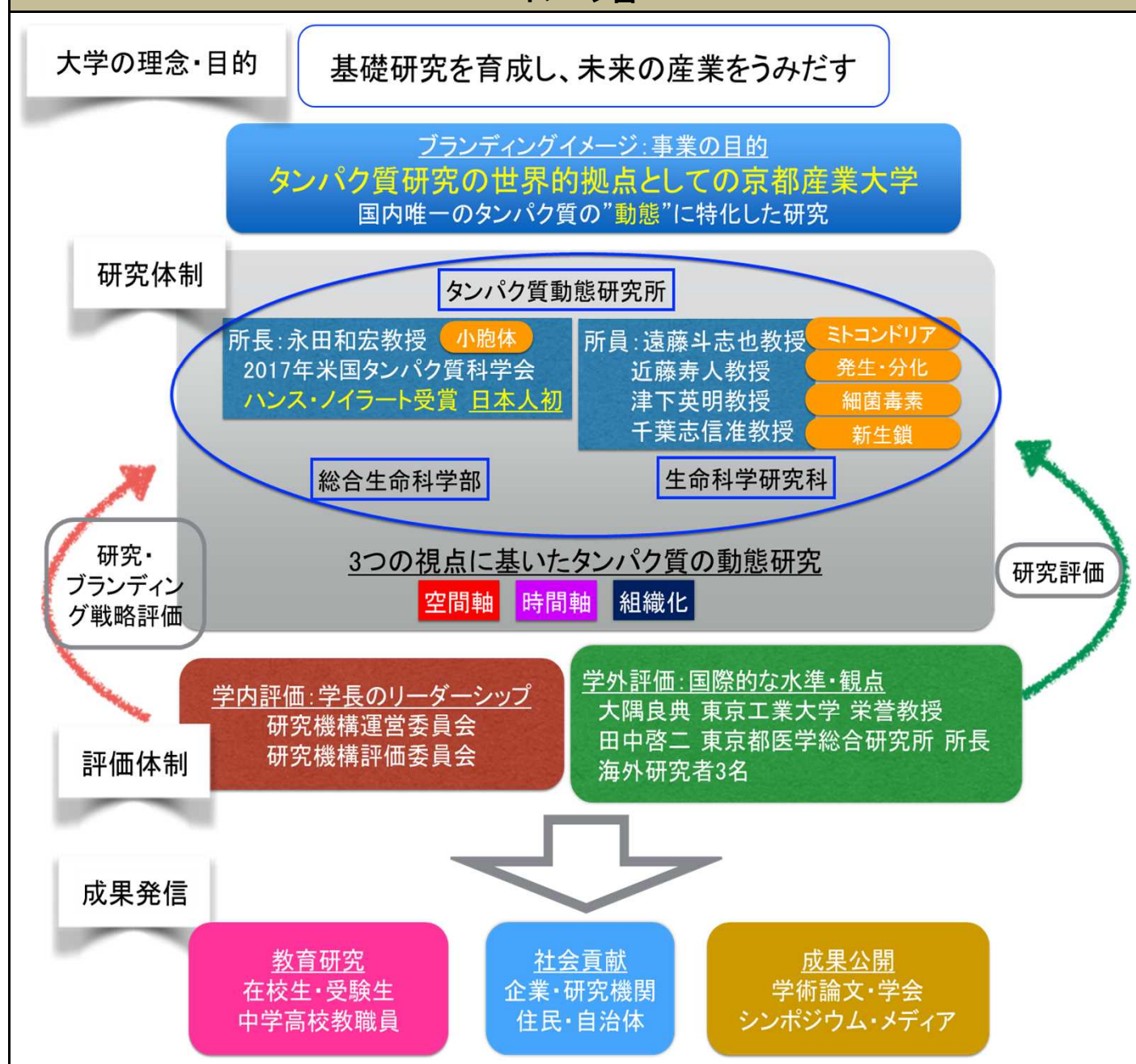


平成29年度私立大学研究ブランディング事業計画書

1. 概要（1ページ以内）

学校法人番号	261003	学校法人名	京都産業大学		
大学名	京都産業大学				
主たる所在地	京都府京都市北区上賀茂本山				
事業名	“生命活動の根幹”をなすタンパク質研究の世界的拠点の形成と推進				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	12060人
参画組織	タンパク質動態研究所、総合生命科学部、生命科学研究科				
審査希望分野	人文・社会系		理工・情報系	生物・医歯系	○
事業概要	京都産業大学は基礎研究を育成し、産業と連携することを理念とする。本事業では、本学が他の私立大学に先駆けて導入した生命科学、その中でも世界水準のタンパク質動態研究に焦点をあてる。本研究では、タンパク質の構造と機能を動的な時空間の座標軸の中で解析し、タンパク質機能異常が原因の難病の解明まで発展させる。研究成果を国内外に広く発信し「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」のイメージを構築する。				

イメージ図



2. 事業内容（2ページ以内）

（1）事業目的

京都産業大学は、大学名が示す通り、大学の教育・研究を通じて、大学と社会（産業）とをむすびつ
けることを建学の精神とする。この精神に基づき、本学は創設以来、基礎研究を育みつつ、産業界との
連携を図ってきた。生命科学に関しても、私立大学では他の大学に先駆けて、工学部生物工学科を開設
して基礎研究に着手した。その取り組みは、今日では大きく発展し、タンパク質動態研究所で世界レベル
の研究を展開し、総合生命科学部と生命科学研究科において生命科学の先進的な教育を実施している。本
事業では、本学の生命科学研究、特にタンパク質動態に関わる研究をブランディング事業として位置付
けて発展させるものである。

ブランディングの選定にあたり、まず現状と課題を分析した。「大学ランキング2018（AERA朝日新聞出
版）」によると、本学は「平均論文品質」（2011-2015年）で国内15位、「ネイチャー掲載論文」（2011-
2016年）26位（6本）、「サイエンス掲載論文」（2011-2016年）40位（2本）、科研費ランキング（配分
総額）87位（343,590,000円）にランクしている。2014年度には、NatureおよびScience掲載年間論文数
で、国内私立大学ランキング第1位（6本）、国公立を含む全国大学別で第7位であった。これらのデー
タは、本学が極めて高い研究力を持ち、本学の長年の基礎研究への取り組みが実をむすびつつあることを示
している。本学の研究のなかでもタンパク質関連の研究は、研究レベルを大きく押し上げてきた。本学
は、2011年に私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択されたことを受け「構造生物学研究センター」
を開設し、2016年にはそれを世界展開型の「タンパク質動態研究所」へと発展させた。同研究所は、日本
人で初めて米国タンパク質科学会からハンス・ノイラート賞を受賞した永田和宏教授を研究所長、さら
に遠藤斗志也教授、近藤寿人教授などの世界をリードする研究者を所員とし、極めて高いレベルの研究を
展開している。また、ノーベル生理学・医学賞の受賞者である東京工業大学 大隅良典教授、ラスカー
賞、ガードナー賞の受賞者Ulrich Hartl、Peter Walter両教授をはじめとする、タンパク質研究の世界
的権威5名を招聘研究者（荣誉教授）として迎え、世界基準で評価・助言を得られる体制を整えてい
る。

その一方、日経BP大学ブランドイメージ調査（2016-2017年）では、本学の卓越した研究力がステーク
ホルダーに伝わっておらず、ブランドイメージに反映されていないことが判明した。

以上の現状分析と課題に対して、本学は生命科学、その中でも世界レベルの研究を展開しているタンパ
ク質研究を本学のブランディング事業と位置付けた。そして、建学の精神に基づき、研究成果を社会（産
業）と「むすび」つけ、学部・研究科との連携を通じて、大学のブランド「タンパク質研究の世界的拠
点としての京都産業大学」をステークホルダーに広く展開し、タンパク質研究において世界で確固たる
位置を築いていくことを事業目的とする。

【大学の将来ビジョン】

本学の建学の精神は「将来の社会を担って立つ人材の育成」であり、設立当初としては画期的な「学問
と企業をむすぶ」ことを理念とした。その精神を今日においても継承し、2015年の創立50周年を機に、
2030年度にあるべき本学の新しい姿を“神山STYLE2030”としてまとめ「むすんで、うみだす。」をス
ローガンに改革に邁進している。これは、学問を起点として、社会・企業・自然などに働きかけて、何か
と何かを「むすんで新たな価値を創造」するものである。この取り組みには、基礎研究の推進が不可欠で
あり、タンパク質動態研究所、植物ゲノム科学研究センター、神山天文台、益川塾など6研究所、2セン
ター、1天文台、1塾の研究体制を整備し、9つの学部、10研究科の連携のもと研究成果を教育に還元
し、社会で活躍できる人材を育成している。

本学は、これまでの基礎研究に関する取り組みをブランディング事業により発展させて、研究の発展、
教育への還元、ステークホルダーへの情報発信を強化する。本事業においては、タンパク質研究における
本学の強みをさらに推進し、タンパク質研究を国際レベルで発展させて「タンパク質研究の世界的拠点
としての京都産業大学」のブランディングを確立するものである。

（2）期待される研究成果

本事業はタイプB【世界展開型】として先端的研究拠点の整備により生命科学の進展に寄与していく。
具体的には、タンパク質動態研究所を中心として、総合生命科学部、生命科学研究科と連携して実施する
研究プロジェクトにより生み出される研究成果を、学会・論文発表、国際シンポジウム、一般市民、高校
生に向けたイベントを通じて発信する。これらの取り組みを通じて、研究成果・タンパク質研究の重要性
を広くアピールする。蛋白質研究所は大阪大学などにもすでに存在するが、タンパク質の合成と分解、
輸送、および分子間相互作用などの分子動態を視野に入れた「タンパク質動態」を研究する研究所は、
私学のみならず国公立研究機関にもまだ存在しない。生命活動の本質を担うタンパク質分子の生命活動
における動的な機能、およびその破綻としての病態を理解することが本研究所のミッションであり、その
研究活動と成果の発信は、本学ステークホルダーを含む一般市民・学生に対しても大きな啓蒙的效果を
持っている。研究成果の測定は、主要学術誌への論文掲載数や学会発表で、またステークホルダーに対す
る成果の測定は、シンポジウム、講演などのアウトリーチ活動の実績により評価する。また、著名な学外
研究者による評価・助言や、研究機構評価委員会による自己点検・評価も合わせて実施する予定である。

本事業の研究プロジェクトでは「タンパク質動態研究によって難病克服のための世界展開を図る」こ
とをねらいとする。

生命活動を担う、最も重要な分子はタンパク質であり、したがってその機能の研究は、生命科学研究の根幹をなす。タンパク質は遺伝情報に従って作られるが、生体内では、常に、合成、成熟（構造形成）、移動（輸送）、そして分解のバランスに基づく恒常性が担保されねばならない。タンパク質に関する従来の研究は、個々の成熟タンパク質の機能と構造に関するものがほとんどであり、それらをタンパク質の動態と関連づけて捉える研究は少ない。

本提案における「タンパク質動態」とは、**①時間軸、②空間軸、③組織化、の3つの視点から包括的にタンパク質の機能、構造、役割を捉える**ものである。

①時間軸：すべてのタンパク質は、合成、成熟、移動、分解の時間軸に沿った存在である。本研究所の構成員によって、生まれたばかりのポリペプチド（新生鎖）にも機能があることが明らかにされ、新生鎖生物学という新しい学問分野が世界的に爆発的に発展する基礎を築いた。また老化し変性したタンパク質が、アルツハイマー病を始めとする種々の神経変性疾患などを引き起こすことが知られている。

②空間軸：タンパク質はそれが正しく機能する場へと、細胞内を移動・輸送される。タンパク質がどのような環境にいるかによって仕事の種類も効率も著しく影響を受ける。このような空間軸の観点から、タンパク質動態を解明する。

③組織化：タンパク質は決して単独では働かず、他のタンパク質または他の分子との相互作用が機能に必須である。機能的な集合体（謂わば家族）を作るために、さらに自身の分解にも他のタンパク質との相互作用が必要である。

これらタンパク質動態の3つの側面のどれか一つに異常が生じると、著しい障害が引き起こされる。その代表例が、アルツハイマー病、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症（ALS）などの神経変性疾患や、糖尿病を一例とする加齢に伴う種々の病態である。超高齢化社会に突入しつつある我が国において、上記3つの視点を包含したタンパク質動態研究、タンパク質品質管理機構の研究は必須のものと考えられる。

本研究プロジェクトは、**国際的に高い評価を得ている研究者を研究代表者とする5つのグループから**構成され、上記の3つの視点からタンパク質動態を解析する。

(1) **新生鎖グループ**／代表者：千葉志信准教授／課題：新生タンパク質の動態と生理機能／内容：新生タンパク質の「作られる過程」が新生タンパク質のその後の機能獲得や細胞の機能調節に関与しているという新たな概念が生まれつつある。その鍵を握る新生タンパク質と細胞内因子との動的相互作用の解明を目指す。

(2) **小胞体グループ**／代表者：永田和宏教授／課題：タンパク質の品質管理機構に基づくオルガネラ恒常性の維持機構／内容：新生タンパク質は、正しくフォールディング（折り畳み）されて初めて機能を発揮する。種々のストレスや老化等によってタンパク質が変性すると、これを再生ないしは分解処理する。タンパク質の品質管理機構が働く。その分子機構を明らかにし、オルガネラおよび細胞の恒常性維持機構の解明を目指す。

(3) **ミトコンドリアグループ**／代表者：遠藤斗志也教授／課題：ミトコンドリア生合成を担うタンパク質の動態と機能／内容：真核細胞の必須オルガネラ、ミトコンドリアにはタンパク質の輸送及び脂質の合成・配送を担う巧妙なタンパク質のネットワークが構築されている。このネットワークの機能を、構成タンパク質の構造と動態という観点から理解する。

(4) **発生・分化グループ**／代表者：近藤寿人教授／課題：細胞・組織をタンパク質の動態システムとして成立させる転写因子制御／内容：細胞が分化・発生というプロセスを経ることによって、一定の構造と機能を持った細胞に成熟し、恒常性を維持するためには、細胞間および細胞内シグナル伝達と、転写因子による遺伝子発現制御が重要である。これらの作用機構を解明し、それらがタンパク質の動態システムとして細胞・組織を成立させる原理を明らかにする。

(5) **細菌毒素グループ**／代表者：津下英明教授／課題：感染症因子タンパク質の動態と機能／内容：細菌はタンパク毒素を用いて宿主細胞を攻撃する。特に二成分毒素では、酵素成分Iaと、酵素成分を細胞内に透過させる膜結合成分Ibからなっている。X線結晶構造解析とcryoEMを用いて、酵素成分IaのIb膜孔を介した透過メカニズムを明らかにする。

「期待される研究成果」として2つの目標を掲げる。

第一の柱は、研究成果の論文および学会における発表である。5つのグループの研究成果を、Nature、Science、Cellなどを含む国際誌に論文を公表するとともに、国内外の学会等で積極的に発表する。

第二の柱は、ステークホルダーへの情報発信である。国際シンポジウムを開催する（平成31年度、33年度）ことによって、国内外の研究者、関連企業に向けて国際的なレベルで研究成果を発表し、本大学のブランド力の向上をはかる。**大隅良典教授（東京工業大学、ノーベル賞受賞者）、田中啓二教授（京都総合医学研究所）ら本研究所アドバイザー**を含めた国内外の著名研究者を集め、本事業の評価の場としても機能させ、研究の着実な進展をはかる。次に公開市民講座等の定期的な開催である。ブランディングの周知が不十分な本大学学生の保護者、卒業生を含む一般市民にむけて、タンパク質動態がいかに我々の健康、病態に深く関与しているかの啓蒙活動を行う。また、中高生を含めた学生へも働きかける。早くから生命科学のおもしろさに触れてもらうことによって、進行しつつある研究者人口の減少、大学院博士課程への進学者の減少などに歯止めをかけることに貢献したい。

3. ブランディング戦略（5ページ以内）

1. 大学の将来ビジョンについて

京都産業大学は、「豊かな人間性と高い倫理観を備え、全世界の人々から尊敬される日本人として、全人類の平和と幸福のために寄与する精神をもった人間を育成すること」を建学の精神として1965年に創立した。学歌においては、産業を「むすびわざ」と読み、当時としては画期的な「学問と企業をむすぶ」ことを建学の理念とした。この理念の実現に向けて、本学は、国際感覚を有し、産業界で活躍できる人材育成のための教育を行い、研究においては、基礎研究を充実させ、その研究成果を社会（産業）に連携させる（「むすぶ」）ことを目的としてきた。

2015年に創立50周年を迎えた本学は、これまでの取り組みを継承、発展させ、2030年度の本学のあるべき姿を構築するための中長期計画として“神山STYLE2030”を策定した。この計画においては、本学の目指すべき大学像として「むすんで、うみだす。」を、育成する学生像として「むすぶ人」をスローガンとして設定した。これらの方針は、部局長会議、教授会を通じて全教職員に周知・共有され、学長の主導のもと“神山STYLE2030”の実現に向けて、全学的に取り組んでいる。

本学のアイデンティティーは、「むすぶ」に集約される。大学像「むすんで、うみだす。」は、「学問」と「社会」「企業」「自然」をむすぶ大学、「京都」と「日本・世界の諸地域」をむすぶ大学、「むすぶ人」をうみだす大学として、学生像「むすぶ人」は、「人」と「人」をむすぶ、「知識」と「実践」をむすぶ、「京都」と「日本・世界の諸地域」をむすぶことができる人材を意味する。本学は、「“むすび”ます宣言」を行い、何かと何かをむすびつけることで、新たな価値を創造していき、「京都産業大学＝むすび大学」と言われるまで徹底的に改革を推進していく方針を打ち立てている。

このコンセプトを本学の全教職員が理解・共有した上で、①教育・学生支援、②研究改革、③社会貢献・地域連携・ステークホルダー連携、④組織・人事戦略、⑤財務戦略、⑥広報戦略、⑦キャンパス計画の各項目について具体的な改革プランを策定し、改革に着手しつつある。この中の②研究改革において、本学は戦略的研究領域を設定している。これは、本学の先進的な研究の中から、ブランディングに資するもの、あるいは将来的社会ニーズを先取りしたものなどを選定した。その選考は学内に広報・周知し、公募する申請課題の中から、学長が委員長を務める研究機構運営委員会において、建学の精神に照らし、本学のブランディングにふさわしい研究課題を選定する。

本学は、基礎研究を奨励・育成し、その研究成果を産業とむすびつけることに力を入れてきた。戦略的研究課題も、基礎研究を行うものが多く選定され、選定された研究グループを母体として、研究所や研究センターが組織化されてきた。今日では、タンパク質動態研究所、植物ゲノム科学研究センター、神山天文台、益川塾など、6研究所、2センター、1天文台、1塾の研究体制を整備している。この中でもタンパク質動態研究所については、文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択された研究プロジェクト「タンパク質の生成と管理」（平成23年度～平成27年度）の実施組織として設置した構造生物学研究センターを発展的に再構築したものであり、“神山STYLE2030”の実現に向けて国際研究力を有する世界展開型の研究所として平成28年4月に開設した。

本研究所は、永田和宏教授、遠藤斗志也教授、近藤寿人教授等の世界のタンパク質研究をリードする研究者を所員としている。永田教授が、2017年、優れた国際的なタンパク質科学研究を顕彰するハンス・ノイラート賞を日本人で初めて受賞、2016年には遠藤教授が文部科学大臣表彰「科学技術賞」を受賞するなど、すでにその実績は国内外で高く評価されている。また、競争的外部資金についても、特別推進研究、基盤研究(S)、基盤研究(A)、CREST等の大型資金を獲得している。さらにこれまでに、

Nature, Science, Cell等のトップジャーナルに論文掲載の実績もあり、本学のブランディング事業としてふさわしい研究を展開している。また、同研究所の外部評価委員として、ノーベル生理学・医学賞を受賞した東京工業大学 大隅良典 栄誉教授を含む5名の世界的研究者を迎えて、国際レベルでの評価・助言体制も整備している。研究所員は全員が総合生命科学部、生命科学研究科の指導教員である。本ブランディング事業では、研究所と学部・大学院の連携のもと、研究のさらなる効率化を図るとともに、研究成果の教育への還元も想定している。



なお、本事業のコンセプトについては、研究機構運営委員会にて審議・決定して、部局長会を通して、各部署の全構成員に周知・共有している。

2. 本事業の対象（ステークホルダー）

本事業は、タンパク質研究の中でも“動態”に特化した特色ある研究である。本研究の推進はタンパク質科学の基礎研究に貢献するだけでなく、**難病の克服や創薬等の応用研究にも大きく貢献**するものであり、社会的にも大きな影響がある。研究成果を学術雑誌や専門学会などで公開・発信することで、生命科学分野の研究関連機関、製薬・医療関連企業、学術学会などへの貢献が考えられる。また、本事業の進捗状況や研究成果を本学ホームページやプレスリリースなどで積極的に公表し、「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」というブランディング戦略を展開することで、地域住民・企業など地域における認知度を高める。

これらの取り組みを通じて本事業の研究を、**企業との共同研究などに発展**させ、応用研究の推進、外部資金の獲得へと結びつけることが期待できる。さらに、オープンキャンパス、模擬授業、JSTのひらめきときめきサイエンス（2016、2017年度、総合生命科学部で採択・実施実績あり）などを通じて、**世界レベルの研究成果を中学・高校生や保護者にわかりやすく伝える**ことで、生命科学関連分野を志望する受験生やその保護者に本学の認知度を高め、勉学意欲が高く、21世紀の生命科学を担っていこうとするモチベーションの高い受験生の獲得に繋げることができる。

本学は、「**より良い教育は、より良い研究から**」を教育目標に掲げている。より充実した研究を行うことで、はじめて在学生により良い教育を施すことが可能となる。本事業で世界的にもトップレベルの研究を展開していくことで、本学で生命科学を学ぶ学生（総合生命科学部生、生命科学研究科大学院生、共通教育科目（一般教養科目）で生命科学分野科目を履修する学生）は、最先端の研究成果やその動向を知ることができる。**世界の第一線で研究をしている教員が、受講生に研究の醍醐味を教授**することで本学在学生の知的好奇心、向上心を喚起することが期待できる。

本学総合生命科学部および大学院生命科学研究科の学生の多くは、生命科学の専門的技術・知識を活かした就職を希望している。製造業、その中でも、医薬・製薬企業、医療機器、実験器具などを扱うメーカーにおいて、研究・開発職や営業職などで活躍する学生は多い。本事業の研究を促進し、研究成果を社会に還元するとともに、効果的な情報発信を行うことで、**総合生命科学部や生命科学研究科の学生が志望する企業などに認知度が高まり、学生の卒業後の就職先として繋げていく**ことが期待できる。

3. 事業を通じて浸透させたいイメージ

本事業では「**タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学**」というブランディングイメージの構築を目指す。これまでにNatureなどのトップジャーナルに論文を公表し、大型の外部資金を獲得するなど世界水準の研究力を誇るタンパク質科学の基礎研究を推進し、その研究成果を産業とむすびつけ、新たな価値を創造してきた。本事業の取り組み（基礎研究）が難病克服、創薬事業などの応用発展にむすびつくことで、京都産業大学は「むすんで、うみだす。」大学として「タンパク質研究」を通して世界に貢献していく。

4. 現状の本学イメージおよび認知に係る把握・分析について

本学のブランドイメージ、特に研究分野に係る情報については、各種の分析により研究力の高さを実証するデータが社会に発信されている。

(1) 「Nature」および「Science」に掲載された年間論文数

世界的にも特に権威のある学術雑誌「Nature」が発信している「Nature Index」の2014年4月1日～2015年3月31日において、**本学はNatureおよびScienceに掲載された年間論文数ランキングにおいて、国内私立大学第1位、国内全大学で第7位**であった。

Institution outputs 1April 2014 – 31March 2015
Nature Indexより国内の大学のみ抜粋（★は私立大学）

	Institution	AC		Institution	AC
1	The University of Tokyo (Utokyo)	40	6	Tohoku University	7
2	Kyoto University	18	7	★ Kyoto Sangyo University	6
3	Osaka University	16	8	★ Keio University	4
4	Nagoya University	14	9	Tokyo Institute of Technology (Tokyo Tech)	4
5	Hokkaido University(HU)	8	10	Kumamoto University	3

(2) 「大学ランキング2018」AERA朝日新聞出版から見た本学の研究力評価（一部抜粋）

- ・ 論文引用度指数ランキング
「平均論文品質」（正味統計2011～2015年）：15位
- ・ 「Nature」「Science」ランキング（2011～2016年）
Nature掲載論文：26位（6本）
Science掲載論文：40位（2本）
- ・ 科研費ランキング
科学研究費補助金（配分総額）：87位（343,590,000円）

- ・ 学長からの評価ランキング
※2016年11月に、全国の国公立大学746校の学長宛に行ったアンケートの結果
研究面で注目：35位

これらのアンケート結果は、本学の研究力は実績も十分にあり、大学の規模も考慮するとランキング以上の高いレベルであること、また本学の研究が他大学からも認知されていることを示す客観的なデータである。

次に、ステークホルダーが持つイメージについて検討・分析を行った。

(3) 日経BP大学ブランドイメージ調査（2016～2017）近畿編（一部抜粋）

有識者、学生の父母を対象としたイメージ調査（一般イメージ）では、「一流感がある」「ステータスが高い」において本学は調査大学（66校）の平均値を下回っていた。しかし、「知名度がある」では平均値を大きく上回っていた。また、「いま注目されている、旬である」は、学生父母で平均値を上回っていた。

有識者、学生の父母、教職員を対象としたイメージ調査（大学ブランドイメージ）では、「他大学にはない魅力がある」「研究施設が充実している」において、本学は、平均値以下であった。一方で、「地域産業に貢献している」では平均値を大きく上回っていた。

		有識者		学生の父母		教職員	
		本学	調査大学 (66校)平均	本学	調査大学 (66校)平均	本学	調査大学 (66校)平均
一般イメージ	いま注目されている、旬である	2.4	3.0	4.0	2.9	—	—
	一流感がある	2.1	6.6	2.4	5.9	—	—
	ステータスが高い	1.9	5.3	1.3	4.7	—	—
	知名度がある	10.7	8.9	13.3	7.7	—	—
大学ブランド	他大学にはない魅力がある	2.8	3.0	2.0	2.7	4.6	4.7
	研究施設が充実している	1.4	1.8	1.5	1.8	3.1	3.2
	地域産業に貢献している	3.3	1.7	4.5	1.9	6.7	3.3

上記の分析から、本学の研究力は「研究内容・実績」に関しては高いレベルにあり、研究者や大学等研究機関からも評価されている。しかし、その本学の高い研究力は、研究者、大学等研究機関という研究専門分野での狭い範囲でのブランドイメージにとどまっている。受験生・在学生および保護者などには、知名度が高く、地域産業での貢献も認められているが、研究を通じた本学の魅力が広く浸透していない状況である。そこで、本学が保有する潜在的な高い研究力を積極的に広く社会へ発信して、本学の研究ブランディングイメージを確立する必要がある。特に本学の高い研究力、一流の学術雑誌への論文掲載数、外部資金の獲得、企業との共同研究などで中心的な役割を担っているタンパク質研究を本学のブランディング事業として選定し、本学の持つ高い研究力とその教育への展開を広く社会に発信することで、受験生、保護者などの層へのブランドイメージの定着を図る。

5. 情報の発信について

本事業のブランディング「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」の構築にむけて、各ステークホルダーに対して効果的な情報発信をしていく。

(1) 学術学会、研究関連機関および企業に向けての情報発信

本事業の研究成果を専門学術雑誌へ論文として公表し、また、関連学会において発表していく。3年目、5年目には国際シンポジウムを開催して、国内外に研究成果を公表する。また、特筆すべき研究成果・実績については、積極的にプレスリリースを行い、報道機関を通して広く社会に成果を発信する。また、大学ホームページ上でも事業の進捗状況、研究成果を発信して、様々な企業との連携、外部資金の獲得につなげていく。

(2) 受験生、在学生、保護者への情報発信

ホームページ、SNS、大学パンフレット・広報誌、オープンキャンパスなどで情報を発信する。これらの手段を効果的に用いて、特に本学がタンパク質科学の特色のある研究拠点であり、**研究成果を産業と連携することで、難病克服や創薬等を通して人々の生命の安心・安全に貢献**できることを発信する。これらの広報を通じて、生命科学の興味を喚起する。オープンキャンパスや中高生、保護者、在学生对象のシンポジウム、公開講座やセミナーなどを通じて、ステークホルダーは、本学の世界的な研究者と直接触れ合い、世界レベルのタンパク質研究を実感し、ブランドイメージを理解できる。さらに、日本科学未来館（東京お台場）研究棟にある本学のサテライトラボで、未来館サイエンスコミュニケーターと協力して、**一般市民向けに「タンパク質の研究」に関するアウトリーチ活動を行う**ことで、タンパク質研究のブランディングを強化する（2016年度実績あり）。各イベントでは可能な限りアンケートを実施して、本事業に対する意見・感想を得て、次の取り組みにフィードバックする。なお、一般市民への取り組みについても、新聞・テレビなどのプレスリリースで本事業が取り上げられるように働きかける。

(3) 地域住民・企業、学生の就職先への情報発信

本事業の研究成果を授業等を通じて、総合生命科学部、生命科学研究科をはじめとする在学生に還元することで、生命科学の正しい知識と技術を持ち、21世紀の生命科学分野に貢献できる人材を育成していく。また、生命科学の専門知識・技術を備えた本学学生が企業に就職し、活躍することで、本学の高いレベルの教育・研究を理解してもらうことができる。さらに、ホームページ、広告、大学パンフレット等の広報手段を用いて本学の潜在的な研究力を発信して、地域住民や企業などをターゲットに「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」のブランディング構築を推し進めていく。

6. 「1～5」の具体的な工程

「1」**大学の将来ビジョン“神山STYLE2030”を2015年に発表**して、それに基づいて様々な改革プランに着手している。その中の研究改革プランにおいて、戦略的領域として本事業の「タンパク質研究」を選定しており、タンパク質動態研究所を中心とした活動を通じて卓越した研究力を顕在化させることで「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」のイメージを構築する。受験生、在学生など身近なステークホルダーへのブランド認知の向上、さらに地域住民、関連企業などにも研究成果を広く還元していく。

「2」本事業の対象（ステークホルダー）および「3」事業を通じて浸透させたいイメージについても、学長を委員長とする研究機構運営委員会において審議され、次のように決定している。①本ブランディング事業は、研究関連機関・企業、学术界だけでなく、受験生・在学生および保護者や地域住民・企業、学生の就職先も対象にして、戦略的に推進していく、②「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」のブランドイメージを浸透させていく。以上の審議内容も、部局長会議、教授会を通じて大学の全構成員に周知されている。

「4」現状の本学イメージおよび認知に係る把握・分析については、本事業を始めるにあたり、①本学の研究力の客観的評価となる大学ランキング調査、②本事業のステークホルダーが本学の研究力に持つブランドイメージについて、評価・分析を行った。その分析に基づき、本事業を通して、ブランディングイメージが十分浸透していない**受験生、保護者にむけて本学の高い研究力を広報**していく。その後は、ホームページアクセス数、イベントでのアンケート調査などの情報をもとに本学イメージ認知度を測定していく。

「5」情報の発信については、伝えたい内容が各ステークホルダーに効果的に伝えられるように適切な手法を検討して発信していく。その上で、下記目標に沿った発信を行い、「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」のブランドイメージを浸透させ、大学ブランドの向上に資する。

(1) 研究関連機関・企業、学术界等への発信

一流学術雑誌、および専門学会で研究成果を積極的に発信していく。さらに、貴重な研究成果については積極的にプレスリリースしていく。大学ホームページでも情報発信して、本学が世界的なトップレベルのタンパク質研究拠点を形成し、高度な研究力を有していることを示していく。これらの情報発信から、**関連企業との連携・共同研究や外部資金の獲得**につなげる。

(2) 受験生・在学生および保護者

本事業の研究成果が、将来の社会においてどのような新しい価値を創造するのかを発信していく。**基礎研究が、難病の克服、創薬等の応用研究に発展**することで、疾病の原因が解明され、新しい治療法への道が開けるなど、タンパク質研究が内包する魅力を一般の方々にも分かりやすく説明していく。大学ホームページ、広告、パンフレット・広報誌、シンポジウム、オープンキャンパス、高校生対象のセミナーやイベントなどで情報を継続的に発信していく。

(3) 地域住民・企業、学生の就職先

地域に根ざした大学、地域に貢献できる大学を目指し、本事業が地域住民の安心・安全や健康に貢献するとともに、生命科学への興味を喚起するような情報発信を行う。大学ホームページ、公開講座、シ

ンポジウム、セミナーなどで、本事業の研究成果が将来の医療・健康分野に影響を与え、新しい価値の創造へつながることを発信していく。

7. 成果指標と達成目標

ステークホルダーごとに、以下に示す具体的指標と達成目標を設定して、効率的な情報戦略を展開する。

(1) 研究関連機関・企業、学术界等への発信

成果指標：学術雑誌掲載論文数、学会での成果報告回数、共同研究受託件数、外部資金受入金額、大学ホームページアクセス数など

達成目標：本事業の推進後により、各指標（論文数、学会での成果報告数、共同研究受託件数、外部資金受入金額、ホームページアクセス数）を増加させる。ただし、発表論文などについては、量的評価に加えて、質的な変化（例：インパクトファクターなど）も考慮して、自己点検・評価を行う。

(2) 受験生・在学生および保護者

成果指標：大学ホームページアクセス数、オープンキャンパス・シンポジウムなどのイベントへの参加者数、およびアンケート調査結果

達成目標：大学ホームページのアクセス数。オープンキャンパスなどのイベントは、参加者数の増加を達成する。さらにアンケート調査の分析を行い、学生に本事業の内容や将来的な応用発展の可能性、新しい価値が生み出す将来的な魅力などが伝わっているか、生命科学の興味を喚起できているかを評価する。

(3) 地域住民・企業、学生の就職先

成果指標：大学ホームページアクセス数、公開講座・セミナー・シンポジウムなどのイベントへの参加者数およびアンケート調査結果

達成目標：大学ホームページのアクセス数。公開講座などのイベントでは、参加者数の分析に加えて、アンケートの分析を行い、参加者に本事業の将来的な医療・創薬分野への応用発展の可能性やそれに伴う社会貢献等が伝わっているか、本事業の研究力の高さを実感できる内容となっているかを評価する。

8. 目標達成の進捗状況を把握する方法

ブランディング戦略の進捗状況については、ステークホルダーごとに下記のとおり把握していく。

(1) 研究関連機関・企業、学术界等への発信

本事業の研究成果については、学術雑誌への掲載論文数を年度ごとに把握し、評価する。さらに、数量的な判断だけでなく、学術論文の内容や質について、論文のインパクトファクターなども指標として総合的に判断する。学会での成果発信・報告については、回数だけでなく、国際会議での発表、招待講演の有無など、その内容についても点検を行い、本学の研究ブランディングに資しているかを判断する。共同研究受託件数、外部資金受入金額、大学ホームページアクセス数などは、本事業に関するニュースサイトへのアクセス回数を年度ごとに点検・評価を行い、件数の増減を把握していく。

(2) 受験生・在学生および保護者

本事業に関する大学ホームページニュースサイトへの年度毎のアクセス件数により点検・評価する。オープンキャンパス・シンポジウムなどのイベントにおけるアンケート調査については、参加者の意見などを分析・評価する。その上で、①本事業の基礎研究内容の推進が将来の社会への新しい価値をうみだし、貢献の可能性を理解できる内容になっているか、②生命科学分野の興味を喚起しているか、③本事業の研究力の高さを伝え、本学のブランドイメージが浸透しているかどうかを把握していく。

(3) 地域住民・企業、学生の就職先

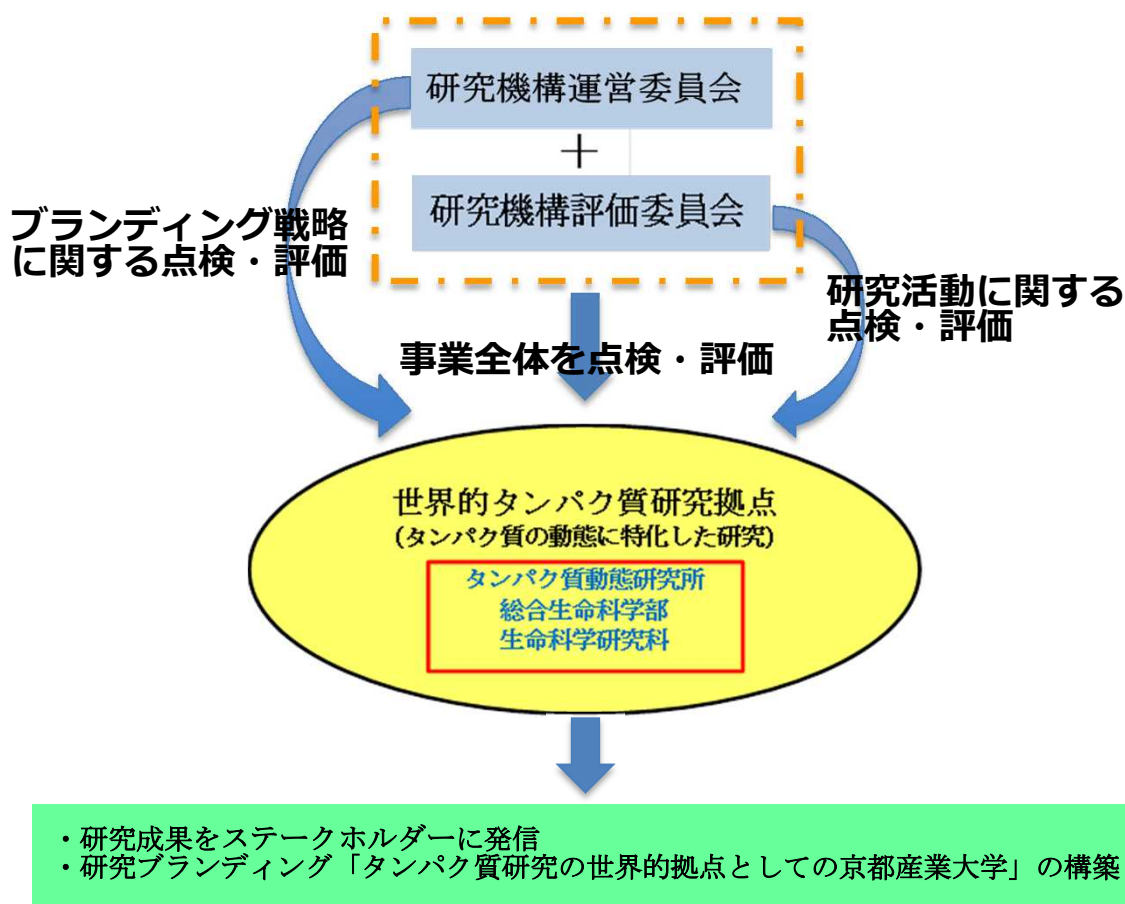
これらのステークホルダーに関しても、本事業に関するホームページのアクセス件数で点検・評価する。公開講座・セミナー・シンポジウムなどのイベントにおけるアンケート調査については、参加者の意見などを分析・評価する。その上で、①本事業の研究成果が、将来の医療・健康業界や社会への貢献の可能性を理解できる内容になっているか、②生命科学分野の興味を喚起しているか、③本事業の研究力の高さを伝え、本学のブランドイメージが浸透しているかどうかを把握していく。

4. 事業実施体制（2ページ以内）

【実施体制】

本事業に関わる基本方針、研究推進、評価・点検体制、全体予算等の重要課題については「研究機構運営委員会」で審議決定する。本委員会は、学長の強力なリーダーシップの下、本学が行う研究活動を推進し、支援するための組織である。学長が委員長となり、副学長（研究機構長兼務）、大学院長、研究所長、センター長、教学センター長、事務局長、学長室長、研究機構事務部長等が構成メンバーとして組織される。すなわち、研究部門・教学部門・事務局のリーダーが構成員となる全学的な組織である。本委員会では、大学の将来ビジョンに沿った研究テーマの選定や研究推進・支援、予算配分の決定、ブランディング戦略等の方針について審議・決定する。

研究機構運営委員会で審議・決定した事項は、部局長会で審議・報告され、教授会を通じて全学の構成員に周知される。なお、本事業の参画組織で中心的な役割を担うタンパク質動態研究所は、本学研究機構内に位置づけされている。研究機構運営委員会の審議内容を受けて、タンパク質動態研究所長は、副学長（研究機構長兼務）と連携を密に情報共有等を行い、研究を推進していく。



【研究活動】

本事業の研究プロジェクトは、タンパク質動態研究所、総合生命科学部、生命科学研究所の連携のもとに実施する。研究プロジェクトは、5つのグループから構成されており、それぞれのグループは「2. 事業内容」に記載した研究テーマについて、「時間軸、空間軸、組織化」の3つの視点を踏まえて研究計画を立案する。研究計画、成果指標および達成目標は年度ごとに作成し、研究機構評価委員会で審議・承認し、研究機構運営委員会に上程し承認を得る。それぞれの研究課題は、学部、および研究科の教員との連携に基づく、効率の良い研究協力体制のもとに推進する。年次終了後には、事業の経過や成果を取りまとめた報告書を作成する。

報告書をもとに、年度ごとに学内および学外点検・評価を受ける。学内においては、学長を委員長とする研究機構評価委員会において評価を行う。評価結果は、研究機構運営委員会に報告し、承認を受けたのち、同委員会から研究プロジェクトに通知される。

外部評価は、2つの観点から行われる。**1つ目は、国際的に著名な研究者からの評価**である。2016年にノーベル生理学・医学賞を受賞した大隈良典 東京工業大学名誉教授、田中啓二 東京都総合医学研究所 所長、および2011年、2014年にアルバート・ラスカー基礎医学研究賞を受賞したFranz-Ulrich Hartl教授 (Max Planck Institute、ドイツ)、Peter Walter (University of California, San Francisco、アメリカ)、さらに分子シャペロン研究の第一人者であるRichard Morimoto教授 (Northwestern University San Francisco、アメリカ) を外部評価委員として、国際的な水準で研究の進捗状況についての評価を受ける。外部による**2つ目の評価は、研究成果の社会への波及効果を考慮して、関連企業に依頼**する。東レ株式会社、株式会社CUREDに対して、研究成果、評価指数、成果の波及効果などについての点検・評価を受ける。これらの点検・評価結果については研究機構評価委員会に報告され、学内点検・評価結果に結果とあわせて審議・了承され、研究機構運営委員会を通して、研究プロジェクトに通知される。研究プロジェクトは点検・評価結果をもとに、必要に応じて年次ごとの研究計画を見直し、研究を推進する。

【ブランディング戦略】

本事業のブランディング戦略については、**研究機構運営委員会で審議・決定**する。同委員会は、事業期間である5年間の全体のブランディング戦略を設定するとともに、毎年の点検・評価結果を基にして、各年度ごとの目標設定を行う。各年度の終了時には「学術学会、研究関連機関や企業」「受験生、在学生、保護者」「地域住民・企業、学生の就職先」などのステークホルダーごとに、発表論文数、ホームページアクセス数、公開講座などの参加者数やアンケート結果などの成果指標に基づいて事業の進捗状況を点検・評価を実施し、次年度のブランディングの展開戦略に反映する。「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」のブランドイメージの構築に向けて、各ステークホルダーに対する効果的な情報発信の方法およびより正確な成果の測定方法へと発展させる。

【事業全体】

本事業の点検・評価については、研究活動部門は「研究機構評価委員会」、ブランディング戦略部門は「研究機構運営委員会」で審議するが、事業全体の点検・評価は「研究機構運営委員会」と「研究機構評価委員会」を同時開催する。本事業の基本方針と研究の進捗状況・成果、研究ブランディングの戦略スケジュールなどを全体で共有しながら、点検・評価を行っていく。

5. 年次計画（3ページ以内）

平成29年度	
目 標	<p>【研究活動】</p> <p>新生鎖グループ：新生タンパク質生合成の動態制御（時間軸、空間軸）</p> <p>小胞体グループ：小胞体レドックス因子によるタンパク質品質管理機構（時間軸、組織化）</p> <p>ミトコンドリアグループ：ミトコンドリアにおけるタンパク質ネットワークの解析（空間軸、組織化）</p> <p>発生・分化グループ：発生過程における転写因子の制御の解析（時間軸、空間軸）</p> <p>細菌毒素グループ：細菌二成分毒素(Ia, Ib)の解析（空間軸、組織化）</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」のブランド周知 ・ステークホルダー（特に受験生、中高生）に対する研究成果の発信 ・研究機構運営委員会、研究機構評価委員会で年度実績を評価
実施計画	<p>【研究活動】</p> <p>新生鎖グループ：枯草菌MifM全領域を対象としたリボソームとの相互作用の遺伝学的解析（時間軸、空間軸）</p> <p>小胞体グループ：ERdj5および新規レドックス因子ERp18によるタンパク質の合成、分解制御機構解析（時間軸、組織化）</p> <p>ミトコンドリアグループ：ミトコンドリア外膜Tom複合体のcryoEM構造解析、ミトコンドリアの脂質輸送に関わるタンパク質の構造解析（空間軸、組織化）</p> <p>発生・分化グループ：各種幹細胞において、Wnt、ヘッジホッグ、ノッチなどのシグナルが、トランスクリプトームに及ぼす影響の検討（時間軸、空間軸）</p> <p>細菌毒素グループ：細菌毒素の基質タンパク質認識機構解析（空間軸、組織化）</p> <p>《目標達成度の測定方法》 全体で年間10報の研究成果を英文誌に報告し、さらに各研究室5年間で1報のTop journalへの掲載を目標とする。</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <p>オープンキャンパスなどのイベント時において、ステークホルダー（受験生、中高生、一般市民）へタンパク質研究の面白さと重要性を発信し、ブランディングイメージの構築をする。年度の研究計画について振り返り、研究機構運営委員会、研究機構評価委員会で点検・評価を行う。</p> <p>《測定方法》 ホームページのアクセス数とツイッターのフォロワー数、イベントへの来訪者数およびアンケートの分析・評価、年度実績報告書の評価</p>
平成30年度	
目 標	<p>【研究活動】</p> <p>新生鎖グループ：翻訳伸長にブレーキをかけるモチーフの解析（時間軸、空間軸）</p> <p>小胞体グループ：ERdj5による小胞体カルシウム動態制御機構の解明（時間軸、組織化）</p> <p>ミトコンドリアグループ：酵母ミトコンドリアの外膜のタンパク質輸送装置および脂質輸送装置の構造と機能解析（空間軸、組織化）</p> <p>発生・分化グループ：幹細胞において、発生の制御の中核を担う転写因子群が、核内の標的遺伝子群とどのように相互作用をしているかを解析（時間軸、空間軸）</p> <p>細菌毒素グループ：膜結合成分Ibの膜孔形成サンプルの調整（空間軸、組織化）</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究成果トピックス発信により世界最先端のタンパク質研究のブランド構築の継続 ・本事業の永続的な展開に向けて、若手の専門的知識・技術をもつ人材を育成する。 ・研究機構運営委員会、研究機構評価委員会で年度実績を評価
実施計画	<p>【研究活動】</p> <p>新生鎖グループ：枯草菌MifMの翻訳アレストモチーフとリボソームとの相互作用の解明（時間軸、空間軸）</p> <p>小胞体グループ：ERdj5によるカルシウムポンプおよびカルシウムチャネルの酸化還元が、その活性をどのように制御しているのか、その機構解明（時間軸、組織化）</p> <p>ミトコンドリアグループ：ミトコンドリア外膜Tom複合体の構造解析、変異体作成と機能解析、ミトコンドリア内外との脂質輸送に関わる装置の構造と機能解析（空間軸、組織化）</p>

<p style="text-align: center;">実施計画</p>	<p>発生・分化グループ：転写因子と制御標的遺伝子群の相互作用をChIP-seqと、蛍光標識転写因子のFRAP解析を併用して解析（時間軸、空間軸） 細菌毒素グループ：Ibオリゴマー化の検証（空間軸、組織化） ≪目標達成度の測定方法≫ 全体で年間10報の研究成果を英文誌に報告</p> <p>【ブランディング戦略】 学内セミナー、オープンキャンパス、市民講座等を通じて、在学生、受験生、一般市民等のステークホルダーへ研究成果を発信する。年度の研究計画について振り返り、研究機構運営委員会、研究機構評価委員会で点検・評価する。 ≪測定方法≫前年度までの評価に加え、専門的知識を持つ人材の活用・貢献度評価</p>
<p>平成31年度</p>	
<p style="text-align: center;">目標</p>	<p>【研究活動】 新生鎖グループ：翻訳アレストの解除が可能なエレメントのスクリーニング（時間軸、空間軸） 小胞体グループ：小胞体における新規タンパク質ERdj8によるオートファジーの制御機構の解明（時間軸、組織化） ミトコンドリアグループ：酵母ER-ミトコンドリア接合部位の構造解析と新規接合部位検索（空間軸、組織化） 発生・分化グループ：さまざまなシグナル系の作用によって、転写因子と核内の標的遺伝子群との相互作用がどのように変動するのかを解析（時間軸、空間軸） 細菌毒素グループ：膜結合毒素Ibの膜孔形成の機能解析と構造解析（空間軸、組織化）</p> <p>【ブランディング戦略】 研究成果トピックス発信により「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」のブランディングを構築する。研究機構運営委員会、研究機構評価委員会で年度実績を評価する。</p>
<p style="text-align: center;">実施計画</p>	<p>【研究活動】 新生鎖グループ：トランスポゾンを用い、MifMやSecMの翻訳アレストを解除しうるタンパク質ドメインやモチーフの網羅的スクリーニング（時間軸、空間軸） 小胞体グループ：ERdj8のノックダウン、過剰発現によりオートファジーの活性化、不活性化が起こることを見出しているため、その分子機構解明。特にオートファゴソームの大きさの制御機構を解明（時間軸、組織化） ミトコンドリアグループ：酵母ミトコンドリアのERMES複合体の結晶構造解析とともに新規接合部位を検索（空間軸、組織化） 発生・分化グループ：シグナル作動状態での転写因子と標的遺伝子群の相互作用の経過時な変動をChIP-seqとFRAPによって解析（時間軸、空間軸） 細菌毒素グループ：Ibのプレ膜孔、膜孔の結晶構造解析およびcryoEM解析（空間軸、組織化） ≪目標達成度の測定方法≫ 中間での事業の総括を行う。全体で年間10報の研究成果を英文誌に報告、3年目の中間評価をノーベル賞など国際的評価を得ている研究者にお願いする。</p> <p>【ブランディング戦略】 ・学術論文、学会発表などを通して国内外へインパクトのある研究成果を発信する。・大学ホームページ、公開講座のイベントを通してステークホルダーに対し進捗状況を発信してイメージ戦略をさらに推進する。・研究計画の中間評価を行い、今後の研究ブランディング戦略の方向性を定める。 ≪測定方法≫ 前年度までの評価に加え、学会発表回数、学術雑誌への論文掲載数、プレスリリース回数</p>
<p>平成32年度</p>	
<p style="text-align: center;">目標</p>	<p>【研究活動】 新生鎖グループ：新生鎖をセンサーとして利用した細胞内タンパク質動態研究ツールの開発（時間軸） 小胞体グループ：小胞体における還元力の源、特にERdj5の上流の探索（時間軸、組織化） ミトコンドリアグループ：酵母ER-ミトコンドリア接合部位の構造と機能解析（空間軸、組織化） 発生・分化グループ：さまざまなシグナル系が、その強度に応じてどのように転写制御因子を差次的に活性化するのかの解析（時間軸、空間軸） 細菌毒素グループ：酵素成分Iaの膜透過機構の解明（空間軸、組織化）</p>

<p>目標</p>	<p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ステークホルダーに対してシンポジウム・セミナーを開催してタンパク質研究の面白さと重要性を発信していく。研究機構運営委員会、研究機構評価委員会での年度実績を評価する。
<p>実施計画</p>	<p>【研究活動】</p> <p>新生鎖グループ：翻訳アレストを解除しうるエレメントを利用し、細胞内で起こるタンパク質動態をモニタリングするセンサーを構築（時間軸、空間軸）</p> <p>小胞体グループ：ERdj5の相互作用因子を網羅的に探索し、ERdj5に電子を渡すレドックスタンパク質の同定と、小胞体レドックスネットワークの全体像の解明（時間軸、組織化）</p> <p>ミトコンドリアグループ：構造解析の継続と、得られた構造情報に基づく変異体作成と機能解析、新規接合部位についても同様の解析（空間軸、組織化）</p> <p>発生・分化グループ：シグナル強度に依存した、転写因子と制御標的の相互作用の変化を、ChIP-seqとFRAPによって解析（時間軸、空間軸）</p> <p>細菌毒素グループ：二成分毒素Ia, Ib複合体での構造解析（空間軸、組織化）</p> <p>≪目標達成度の測定方法≫ 全体で年間10報の研究成果を英文誌に報告</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学術論文、学会、シンポジウム、セミナー、大学ホームページなどを通して、国内外に向けて研究成果を発信し、ステークホルダーへのイメージ戦略をさらに推進する。研究計画の評価を行い、最終年度の研究ブランディング戦略の方向性を定める。 <p>≪測定方法≫ 前年度までの評価に加え本事業研究者の受賞・外部資金の獲得状況</p>
<p>平成33年度</p>	
<p>目標</p>	<p>【研究活動】</p> <p>新生鎖グループ：タンパク質動態センサーを利用した細胞因子の動態の解明（時間軸、空間軸）</p> <p>小胞体グループ：小胞体におけるレドックス、タンパク質、およびカルシウムのそれぞれの恒常性維持機構について、統合的な解明（時間軸、組織化）</p> <p>ミトコンドリアグループ：酵母ミトコンドリアの品質管理に関わる外膜装置の構造と機能解析（空間軸、組織化）</p> <p>発生・分化グループ：転写制御因子が、シグナルの作用と転写因子間の相互作用を介して、新しい細胞状態を生み出す、統合的な機構の研究（時間軸、空間軸）</p> <p>細菌毒素グループ：一般的機構としてADPリボシル化反応機構、二成分毒素の膜透過メカニズムの統合的理解（空間軸、組織化）</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎タンパク質研究が将来に創造する新しい価値や生命科学分野への貢献の可能性について発信、またステークホルダーへ5年間の成果を発信し「タンパク質研究の世界的拠点としての京都産業大学」のブランドを浸透させる。
<p>実施計画</p>	<p>【研究活動】</p> <p>新生鎖グループ：タンパク質動態センサーを利用し、様々な細胞内因子の動態を解析し、タンパク質動態とその働きとの関係についての総合的理解（時間軸、空間軸）</p> <p>小胞体グループ：小胞体における3つの主要なホメオスタシスがERdj5を中心として、いかに緊密にクロストークしているか、その統合的理解（時間軸、組織化）</p> <p>ミトコンドリアグループ：外膜の品質管理複合体について結晶構造解析とvivoと vitroでの機能解析（空間軸、組織化）</p> <p>発生・分化グループ：転写因子群と標的遺伝子群との動的な相互作用に関する5年間の研究成果をシステム論的に分析して、統合的なモデルを提示（時間軸、空間軸）</p> <p>細菌毒素グループ：二成分毒素の動態の統合的理解（空間軸、組織化）</p> <p>≪目標達成度の測定方法≫ 国際シンポジウム開催と研究の総括を行う。論文発表目標を含めた5年目の最終評価を、ノーベル賞など国際的評価を得ている研究者にお願いする。</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学ホームページから世界トップレベルのタンパク質研究成果の情報発信を行う。 ・ステークホルダーに5年間の研究成果を発信する（研究成果報告会、シンポジウム、セミナー等のイベントを想定）。 <p>≪測定方法≫ 前年までの評価を総括し、最終年度としてブランディング戦略の成果と評価をまとめる。</p>

6. 既選定事業との関連（該当する場合のみ：1ページ以内）

該当なし